

〈本文〉

四番

左 勝 枯野

松苗も枯野に目だつ嵐かな

枳風

右

大橋を枯野にわたす入日かな

全峰

左の句、木枯の吹尽して、苗松のそよぐとう

ごきたる、風のやどりめにたつべき物也。寸

松虹梁のすがたをふくみて一句たけたかし。

右も又、かれ野々風景見捨がたく侍れども、

苗松のかたや目に立侍らん。

〈現代語訳〉

左 勝 枯野

嵐が吹き荒れ、千草もすっかり枯れてしまった野中では、健気に揺れ動く緑の小さな松苗の姿が、いつそう際立って見えるではないか。

* 「松苗」は松の苗木。苗松とも。

「枯野」は冬の季題。有賀長伯の『初学和歌式』（元禄9）には、

枯野には寒草をもよみ、又はのべのちぐさも霜にくちはて、霜のみさえ渡る心をもよむ也。或は秋の花野を思ひいで、あはれをもよほし、千ぐさはみなかれはて、残る小篠のみどり寒けしとも。くたら野といふは冬野をいふ。又、つのくにの名所にもあり。枯野はあはれあさからず、そゞろさむき体、相応也。おもしろく興ある体によめるものによるべし。

とある。「枯野」は千草の枯れた野原の意で、色彩感の乏しい野辺の寒々しくも蕭条たる情景を喚起させるところに本意がある。次の西行の『山家集』の例歌など、詞書の内容ともども参考にならう。

陸奥国へまかれりける野中に、目にたつさまなる塚の侍けるを、問はせ侍ければ、これなん中将の塚と申すと答へければ、中将とはいづれの人ぞと問ひ侍ければ、実方朝臣の事となん申けるに、冬の事にて、霜枯れの薄ほのく見えわたりて、おりふしものがなしうおぼえ侍ければ

くちもせぬその名ばかりをとゞめをきて枯野の薄かたみとぞみる
俳諧では、芭蕉の「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」(元禄8『笈日記』)が周知の句だが、江戸時代を通して「枯野」の句は絶えず詠まれ続けている。次にその例句として適宜に選んだものを挙げておく。

霜白し枯野のそばの花月夜

翠紅(天和3『虚栗』)

日あたりもこころに寒き枯野哉

湖風(元禄3『其袋』)

蟪蛄の尋常に死又枯野哉

其角(元禄3『いつを昔』)

棹鹿のかさなり臥せる枯野かな

土芳(元禄4『猿蓑』)

吹風の落つきもなき枯野かな

成菌(元禄6『曠野後集』)

かなしきの胸に折レ込枯野かな

呂丸(元禄7『炭俵』)

獣の道一筋のかれのかな

青柳(元禄7『其便』)

牛の行く道は枯野のはじめかな

桃酔(元禄11『続猿蓑』)

枯野にて目にたつものは小松かな

釣壺(元禄11『泊船集』)

最後の釣壺の句は、枳風の句と類想のようだが、風の存在がないだけ、解釈上は疑問の余地のないほどあっさりとした句にみえる。
なお、この枳風の句は『続虚栗』(貞享4)にも入集する。

右

日が傾き、空の色も変わり始めた頃、その沈みゆく夕日は、まるで枯野に大きな橋を渡しているかのように見えるではないか。

* 「大橋」は「入日」の見立てで、実在しない。「わたす」は架するの意。橋は一般に河川に架かるものだが、ここでは枯野に架かるとした。それにしても「入日」を「大橋」に見立てたところ、いささか想像しにくい光景であって、強引に過ぎるようにも思われる。

(判詞)

左の句、ひとしきり木枯らしが吹き去った枯野では、そよそよと揺れ動く松の苗木が風やどる場所になっていて、目立つものである。小さな松が、虹梁として使われるまでに成長していく姿も彷彿とさせて品格がある。右もまた、枯野の景を大きくとらえた句として捨てがたいが、苗松の句の方がより際立った作だといえよう。

* 「木枯らし」は晩秋から初冬にかけて激しく吹く風のこと。冬の季語。芭蕉は枳風の句に対し、「木枯の吹尽して、苗松のそよぐとうごきたる、風のやどりめにたつべき物」と評しているように、嵐はあらかたおさまったものと解し、そこから「風のやどり」を引き出している。「風のやどり」は風の宿るところ。

これは『古今和歌集』(春歌下)所収の素性法師の歌、

桜の花の散り侍りけるを見てよめる

花散らす風の宿りは誰か知る我に教へよ行きて恨みむ

を念頭に置いたものか。もしそうだとすれば、芭蕉は、野原の草々を枯らして過ぎ去って行った嵐の宿り先は、あの微風になびいている苗松ですよ、と応じたことくである。いずれにしても、この判詞の解く内容が芭蕉独自の鑑賞眼によるものであることに注意したい。果たして作者枳風は、芭蕉が言及する「風のやどり」まで想定していたか否か、疑問は残る。

「寸松」は小さな松。「虹梁」は虹の形のように反りを持たせた梁のこと。梁の部材としてアカマツなどくに耐久性にすぐれているという。ここは「寸松虹梁」で、たとえ今は小さな松であっても、いずれ虹梁に使われることを想わせるような姿を備えている、の意にとる。蘇東坡の「故李誠之待制六丈挽詞」(明曆2『東坡先生詩』ほか)に、

青青一寸松、中_ニ有_一梁棟_ノ姿_一。

とあるのによる。芭蕉は「寸松虹梁」の語句をもって「松苗」の将来にまで思いをめぐらせているわけだが、この点について、枳風の真意を問う必要はなからう。逞しく生育していくことが期待される「松苗」に向けられた芭蕉のこうした把握の仕方は、おのずと一句の鑑賞の幅を広げる方向へと導いてくれるように思われる。

そもそも枳風にしてみれば、枯野一帯に吹き荒れる嵐の中、風の勢いに負けまいと必死になっている(ように見えた)松苗をとらえ、興のおもむくままに詠じたのではなかったか。作者も芭蕉も、冬枯れた情景中にある小さな植物の強靱な生命力に共感していることは確かだろう。しかし芭蕉は、前述したように、木枯らしの吹き止んだ後の苗松の微妙な動きをとらえながら、「風のやどり」まで想起し、鑑賞を深めていこうとする。「寸松虹梁」もしかし。ここでの芭蕉は、思いのほか繊細で深遠な理解を提示していることがわかる。

一方、全峰の「大橋を」の句は、枯野の全景を大胆な手法で描き出しているとはいえ、芭蕉は、そうした理知的な処理による大味な作より、小さな命に秘められた力強さが感得できる枳風の「松苗や」を支持したのである。